

## 久留米市における老人会活動の地域的差異とその要因

平井 誠

キーワード：老人会活動，後期高齢者，人口高齢化，久留米市

### I はじめに

人口高齢化の進展に伴い、地理学分野を含む様々な学問分野から、医療、福祉、経済などの極めて多様なテーマについて調査研究がなされている<sup>1)</sup>。なかでも、重要な研究テーマの1つとして高齢者の生活や余暇活動、「生きがい」に関する研究があげられる<sup>2)</sup>。なぜなら、仕事を退職した高齢者にとって、「余暇」は生きることそのものとなるため、その過ごし方が高齢者の生活にとって非常に重要となるためである。近年、地理学分野でも高齢者の生活行動・生活空間に関する研究が蓄積されつつある<sup>3)</sup>。これらの研究は、アンケート調査やパーソントリップ調査を資料として、高齢者個人の生活行動を詳細に検討している。

高齢者は個人として生活を営むのと同時に、地域社会の一員として、様々な組織に参加して生活している。総務庁長官官房老人対策室によると、高齢者の中で何らかの団体に参加している者は全体の64.8%を占めている<sup>4)</sup>。実際に所属している団体を見ると、老人会33.3%、町内会31.5%、趣味のクラブ11.0%で、老人会に所属している割合が最も高い。老人会は、高齢者の所属する団体として最も基本的な団体である。

しかし、地理学分野において老人会活動を分析した研究は少ない。老人会がどのような活動を行っているのか、また、その活動はどの地域でも同じなのか、それとも地域的な差異が存在するのか、という点は明らかになっていない。老人会活

動に地域的な差異があるならば、その差異の要因を明らかにすることによって、老人会活動や高齢者の生活をより深く理解することが可能になると考えられる。そこで本報告は、老人会活動に関する分析の一端として、福岡県久留米市における老人会活動を事例として、活動の地域的な差異を検討し、その要因について考察を行うことを目的とする。

本報告は以下の手順で分析を行う。II章では久留米市の老人会活動を加入状況および活動内容から分析し、老人会活動の地域的差異を明らかにする。分析に用いる基礎データは、各老人クラブが久留米市に提出した『平成9年度の単位老人クラブ活動実績報告書』である。このデータから、各クラブの加入者数、年間の活動日数および活動内容を把握することが可能である。III章では老人会会長に対する聞き取り調査をもとに、老人会活動の地域的差異の要因について考察する。

久留米市には、約50世帯ごとに組織される単位老人クラブが357存在する(1998年6月現在)。単位老人クラブが独自に活動することは少なく、小学校区ごとに校区老人クラブ連合会を組織し、校区単位でまとまって活動することが多い。校区内の単位老人クラブ間では密接な交流があるが、異なる校区の単位老人クラブとはほとんど交流がない<sup>5)</sup>。このことから、小学校の校区を単位地区として老人会活動を検討する。久留米市では校区が地域区分として一般的に用いられており、各種の統計資料などが校区単位で公表されている。この

ことから、校区を単位地域とすることは適当であると思われる。

研究対象地域である福岡県久留米市は、JR 鹿児島本線、西鉄大牟田線、九州自動車道などが通っており、筑後地方の交通における重要な結節点として機能している（第1図）。1995年の国勢調査によると、久留米市の総人口は23万人に達し、福岡県第3位の都市である。高齢人口比率は13.5%で、日本全体の高齢人口比率とほぼ等しい。校区別が高齢人口比率を見ると、人口高齢化の進展に地域差が存在することが明らかである（第2図）。

久留米市の中心部を形成するのは、篠山校区、京町校区、荘島校区、日吉校区、金丸校区などの市域の北西部である。京町校区、日吉校区にはJR久留米駅や西鉄久留米駅が位置し、荘島校区には間屋街が存在するのをはじめとして、市域の北西部には行政施設および大型小売店が集積している。この地域の高齢人口比率は高く、都市中心部における人口高齢化の進展が明らかである。また、市域の東部に位置する草野校区、山本校区は農業的な土地利用が卓越している。久留米市の総人口に占める農業従事者の割合が4.4%であるの

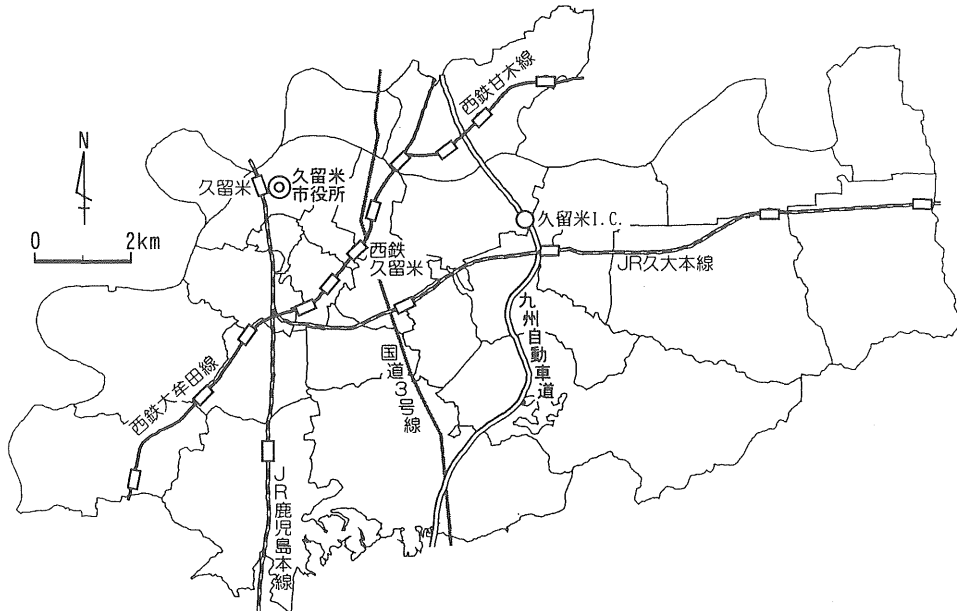
に対して、これらの校区のそれは15%を越えており、久留米市の中でも農村的な地域である。これらの校区の高齢人口比率も高い値を示している。市域の南部に位置する上津校区、南校区、青峰校区、大善寺校区は宅地開発が行われ、久留米市中心部に対する郊外の住宅地域となっている。久留米市の中では、これらの校区の高齢人口比率は低い水準にとどまっている。

## II 老人会活動の地域的差異

### II-1 校区別の加入状況

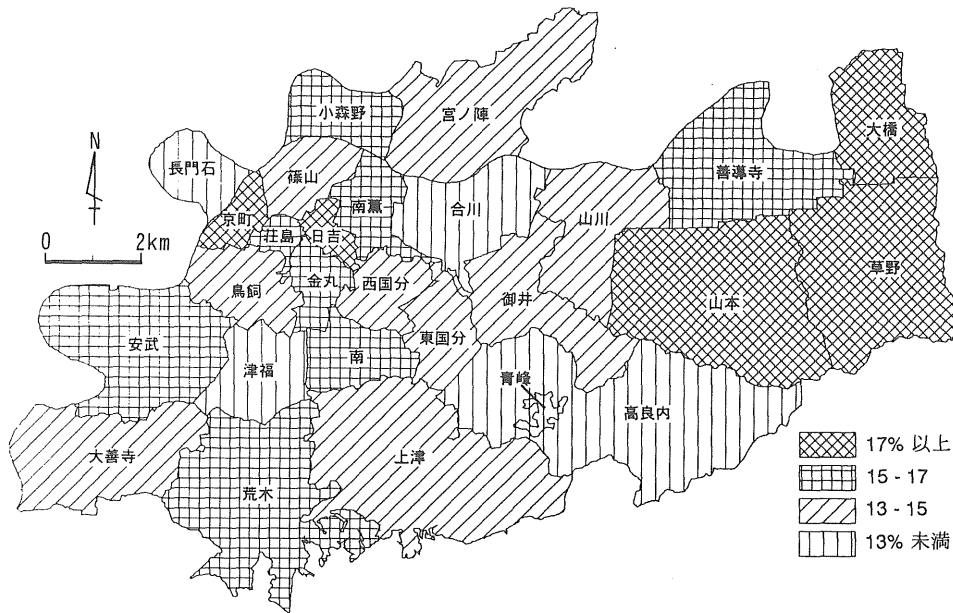
総務庁長官官房老人対策室（1988）によると、60歳以上の高齢者に占める老人会加入者の割合は33.3%であった<sup>6)</sup>。それに対して久留米市における1997年の老人会加入者の割合は43.8%である<sup>7)</sup>。調査年次が約10年異なるため単純に比較することはできないが、全国的に見ても久留米市の老人会加入率は高い水準にあると言えよう。

久留米市における校区別の老人会加入率を第3図に示した。市域の東部に位置する大橋校区、善導寺校区、山本校区、西部の安武校区は加入率が70%を越えており、久留米市の中でも特に加入率



第1図 研究対象地域（1997年）

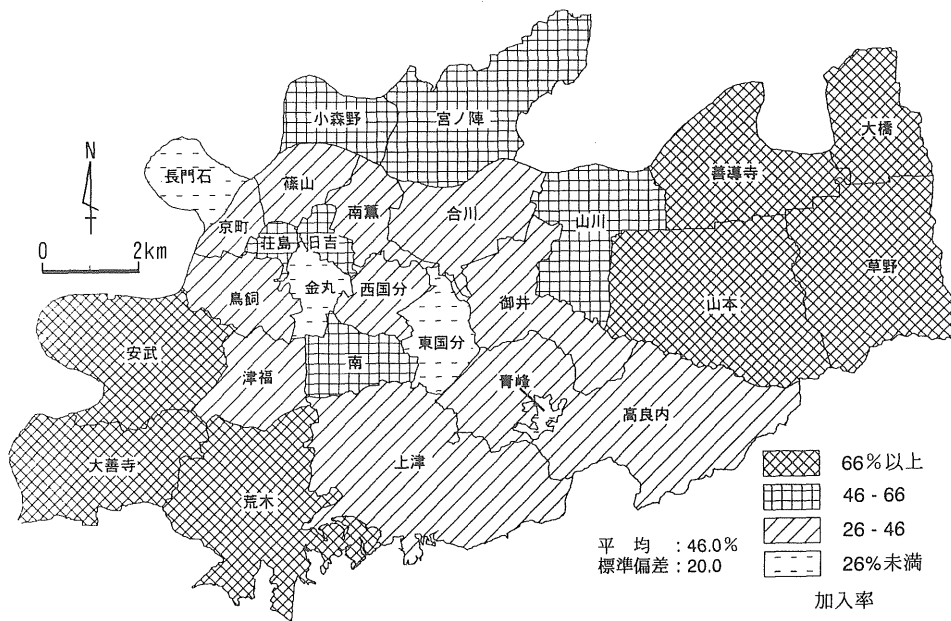
注）校区の名称は第2図以降を参照。



第2図 久留米市における校区別の高齢人口比率（1997年）

注) [高齢人口比率] = [65歳以上人口] ÷ [人口] × 100

(資料：校区別年齢別人口統計表)



第3図 久留米市における校区別の老人会加入（1997年）

注) [加入率] = [老人会加入者数] ÷ [60歳以上人口] × 100

(資料：平成9年度単位老人クラブ名簿および校区別年齢別人口統計表)

が高い。これらの校区は久留米市の中でも農村的な性格を有した地域である。

久留米市の中で最も都市化が進み、行政施設、商業施設などが集積している市の北西部は加入率が低く、特に金丸校区の加入率はわずかに22.5%である。加入率が平均に満たない校区は、久留米市を南北に縦断する国道3号線に沿うように分布している。国道3号線は久留米市の市街地の中心を走る主要道路である<sup>8)</sup>。これらの地域は住宅地、商業施設などが多く、久留米市の中でも都市的な地域である。近年宅地開発がなされた青峰校区、長門石校区の加入率は特に低い。

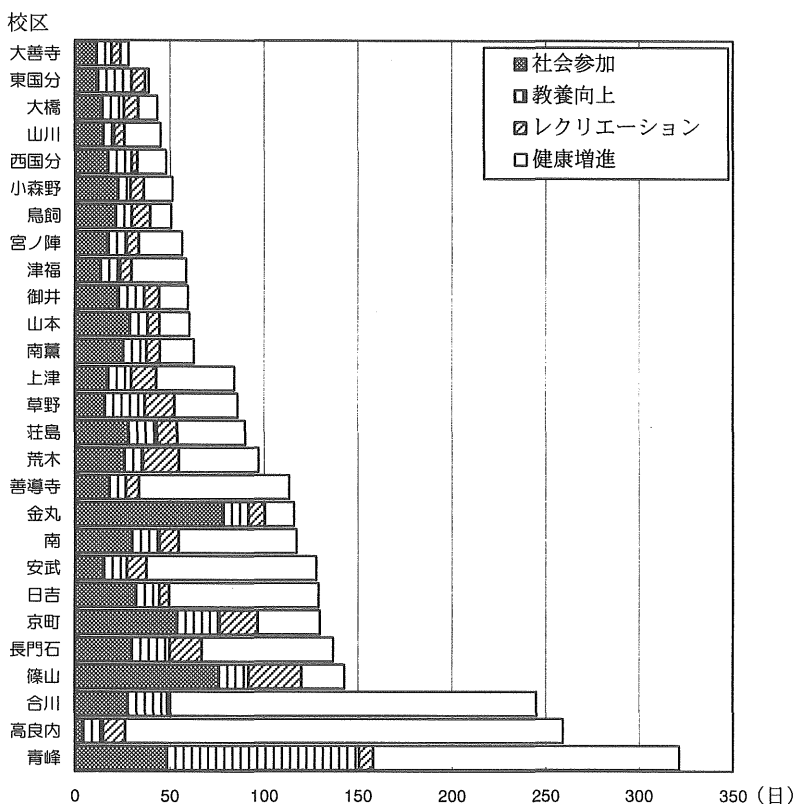
久留米市における老人会加入率の地域的な特徴として、市域の東部および西部の農村的な地域で加入率が高く、都市化の進展した国道3号線に沿った市域の中央部において加入率が低いという

傾向が認められる<sup>9)</sup>。

## II-2 校区別に見た活動内容

老人会は年間を通して、ゲートボール、囲碁将棋、カラオケなどをはじめとする様々な活動を行っている。久留米市ではその活動内容を、①社会参加（神社などの清掃奉仕、声掛け運動など）、②教養向上（講演会、民謡教室など）、③レクリエーション（慰安旅行や忘年会など）、④健康増進（ゲートボールやグラウンドゴルフなど）、の4つに区分している。

校区による活動内容の差異を検討するために、1997年度における校区別の平均の活動日数および活動内容を第4図に示した。27校区中19校区の活動日数が50日から150日程度である。しかし、青峰校区のように活動日数が300日を越える、非常



第4図 久留米市における校区別の平均活動日および活動内容（1997年4月～1998年3月）

（資料：平成9年度単位老人クラブ活動実績報告書）

に活動が活発な校区も存在する。活動日数と活動内容を比較すると、年間活動日数が多い校区ほど健康増進活動が多いという傾向が認められる。つまり活動日数が多く老人会活動の活発な校区は、健康増進活動が活発に行われている。

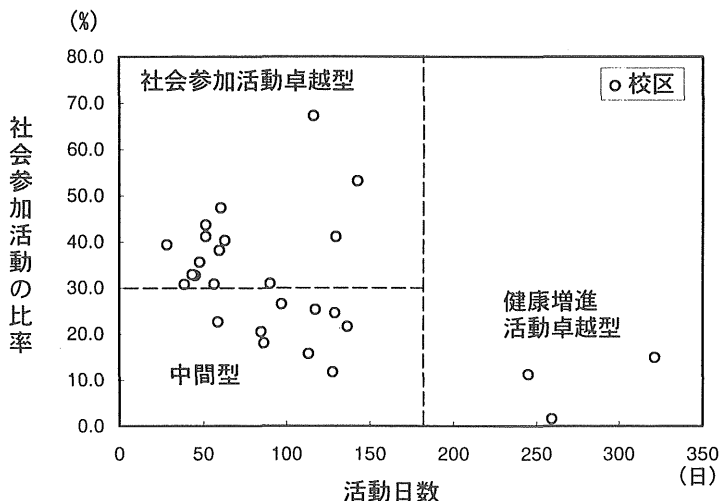
このような活動日数の差異は、定期的に活動を行うクラブの有無と関連している。なぜなら、週に1度活動するクラブが1つあると、1年に50日前後の活動を行うためである。活動日数が非常に多く、健康増進活動の活発な合川校区、高良内校区、青峰校区には、定期的に活動を行うクラブが複数存在していると考えられる。

老人会の活動の中で、社会参加活動は非常に特徴的な活動である。社会参加活動には清掃活動などのボランティア活動の他に、高齢者同士の声掛け活動や寝たきり老人の慰問などが含まれる。教養向上、レクリエーション、健康増進などの活動は、高齢者自身の意思によりクラブを組織し活動する機会が多いのに対して、社会参加活動は高齢者福祉政策の一環として市役所の指導によって行われる場合が多く、その活動に応じて補助金が支払われる<sup>10)</sup>。社会参加活動は他の活動に比べると、高齢者自身の意思がそれほど反映されない受動的な活動であると言える。

第4図を見ると、社会参加活動はすべての校区で行われている。また、27校区中24校区での活動日数が20日から40日程度である。他の活動は校区による活動日数の差異が大きいのに対して、社会参加活動の活動日数は校区による差異が小さい。つまり、社会参加活動はどの校区でも、ほぼ同程度の活動が行われている。先述のように、社会参加活動は市役所の指導による受動的な活動という性格が強い。そのため、すべての校区が社会参加活動を行い、その活動日数もほぼ同規模になると考えられる。

このことから、老人会活動における高齢者の主体的な活動の指標として、老人会活動に占める社会参加活動の割合を用いることができると考えられる。そこで、老人会の活動内容を校区別に検討するために、活動日数および老人会活動に占める社会参加活動の割合の関係を第5図に示した。活動日数が特に多い3校区は社会参加活動の割合が低い。このことは、これらの校区では健康増進活動が非常に活発であることを反映している。これらの校区を「健康増進活動卓越型」と区分した。

その他の校区は、社会参加活動の割合が10%から70%まで多様であるが、特に、30%から50%に集中が見られる。社会参加活動の割合について順



第5図 老人会活動の活動日数と社会参加活動比率 (1997年)  
(資料：平成9年度単位老人クラブ活動実績報告書)

位規模曲線を作成したところ、30%が1つの遷曲点であった。そこで、社会参加活動の割合が30%以上の15校区を「社会参加活動卓越型」、30%未満の9校区を「中間型」と区分した<sup>11)</sup>。

### Ⅱ-3 老人会活動の地域的差異

本節では、前章までの分析の結果を整理し、久留米市における老人会活動の地域的差異を明らかにする。加入状況による区分および活動内容による区分をクロス集計すると、老人会活動は5つの類型に区分された(第6図)。

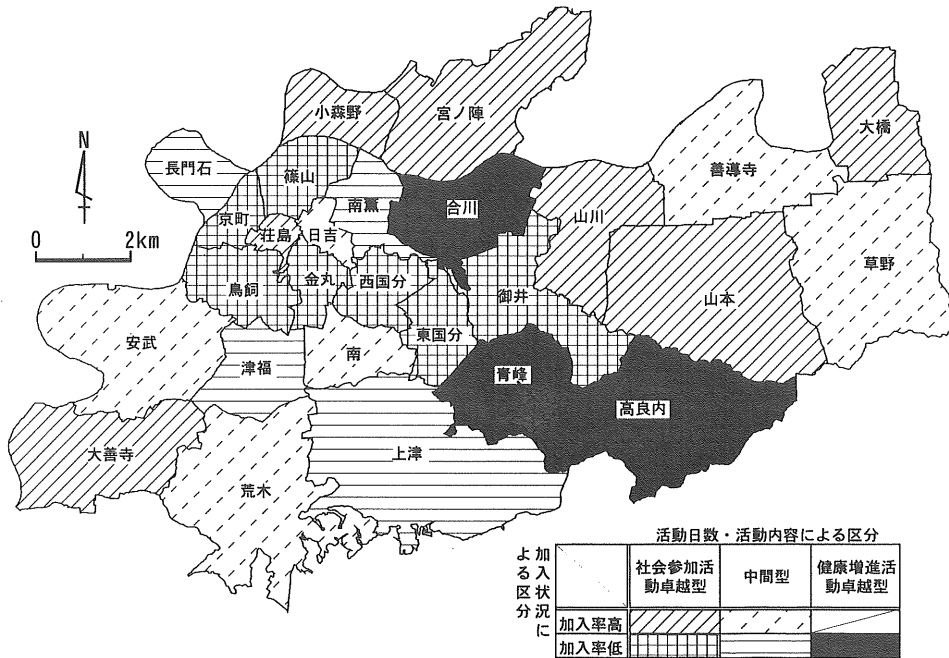
図から、久留米市における老人会活動の地域的な特徴を見ると、大きく3地域に区分することができる。すなわち、市域の1)北西部、2)南西部、3)東部の3地域である。

篠山校区、京町校区から御井校区に至る北西部地域は、久留米市の中心部をなす地域である。この地域の老人会活動は加入率が低く、その活動内容は社会参加活動が卓越する。換言すれば、老人

会に参加しない高齢者が多く、参加した場合でも加入者自身の主体的な活動は少ない。老人会活動がそれほど活発でない地域である。

安武校区、南校区、上津校区などの南西部地域は、住宅地が卓越する地域である。この地域では老人会の加入率は校区によって差異が見られるが、活動内容を見ると中間型に属する校区が多い。つまり、この地域は老人会への加入率こそ低いものの、加入した者が主体的に様々な活動を行っていると考えられる。

山本校区、山川校区以東の東部地域は、農業的な土地利用が卓越する、久留米市の中でも農村的な地域である。この地域は老人会への加入率が高い。農村的な性格の強いこの地域は、コミュニティの結束が強いため、老人会のような地域的な組織への加入率が高いと考えられる。活動内容を見ると、この地域は社会参加活動卓越型と中間型の両者が混在している。加入率が高いものの、義理で名前だけ加入した、という人が多い校区で



第6図 老人会活動から見た久留米市の校区分類(1997年)

注) 加入状況の加入率高: 46%以上, 加入率低: 46%未満で区分した。

活動日数・活動内容による区分は第5図による。

は実質的な活動が行われず社会参加活動が中心となり、積極的に活動する人が加入した場合は、社会参加活動のみでなく様々な活動が行われる中間型になると考えられる。

### Ⅲ 老人会活動の地域的差異の要因

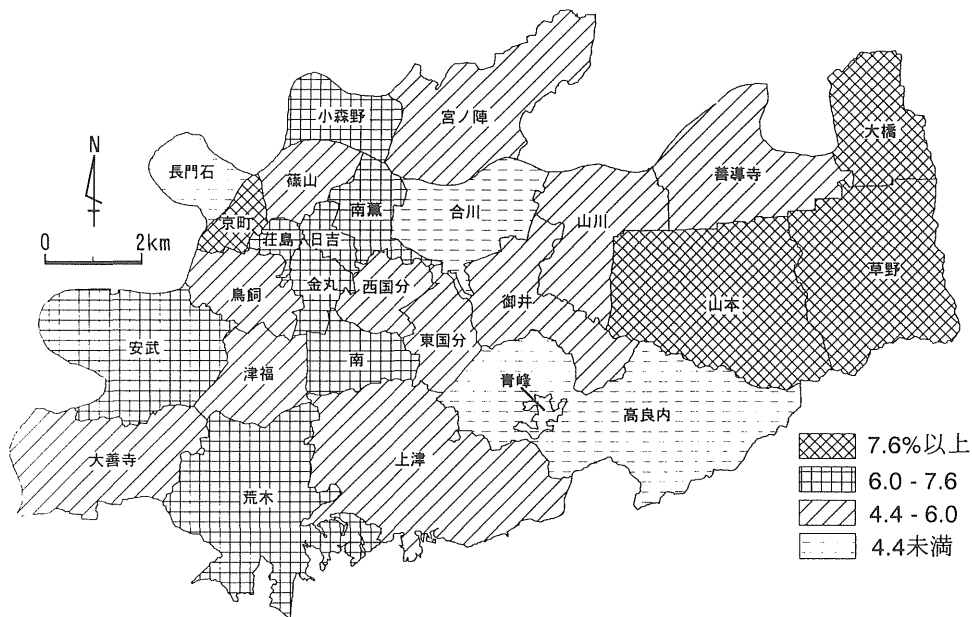
前章の検討から、久留米市における老人会活動に、地域的な差異が存在することが明らかとなった。本章では、老人会会長に対する聞き取り調査から得られた知見をもとに、老人会活動の地域的な差異の要因について若干の考察を行う。

まず、第1の要因として後期高齢人口（75歳以上高齢者）の存在が考えられる。各校区の人口に占める後期高齢人口の割合を第7図に示した。市の北西部や東部の社会参加活動が卓越する校区は後期高齢人口が比較的高い。また、健康増進活動が卓越する青峰校区、高良内校区、合川校区は後期高齢人口比率が低い。老人会活動と、後期高齢人口の比率に何らかの関連があることが推察される。

老人会会長に対する聞き取り調査によると、後

期高齢人口の増加は、老人会活動に2つの影響をもたらす。まず1点目は、老人会の加入者に占める後期高齢者の相対的な増加による活動内容の変化である。後期高齢者は加齢に伴う体力的な衰えのために、ゲートボールなどの健康増進活動や、宿泊を伴う慰安旅行などのレクリエーション活動に参加することが困難となり、活動が継続できなくなる場合がある。たとえば、市の中心部に位置する金丸校区では、昨年まで活動していた日本舞踊のクラブが今年から活動を中止した。

後期高齢人口の存在による影響の2点目として、比較的若い高齢者の老人会への加入への影響が挙げられる。老人会には60歳以上の高齢者が加入することができるが、60歳前後の比較的若い高齢者の中には、自分より10歳以上も年上の人と活動することを好まず加入を拒否する者もいるという。この傾向には、高齢者個人の性格なども影響すると考えられるため、単純に認めることはできない。しかし聞き取り調査によると、都市化の進展した市の北西部で特にこのような傾向が認められるという。



第7図 久留米市における校区別の後期高齢人口比率 (1997年)

注) [後期高齢人口比率] = [75歳以上人口] ÷ [人口] × 100

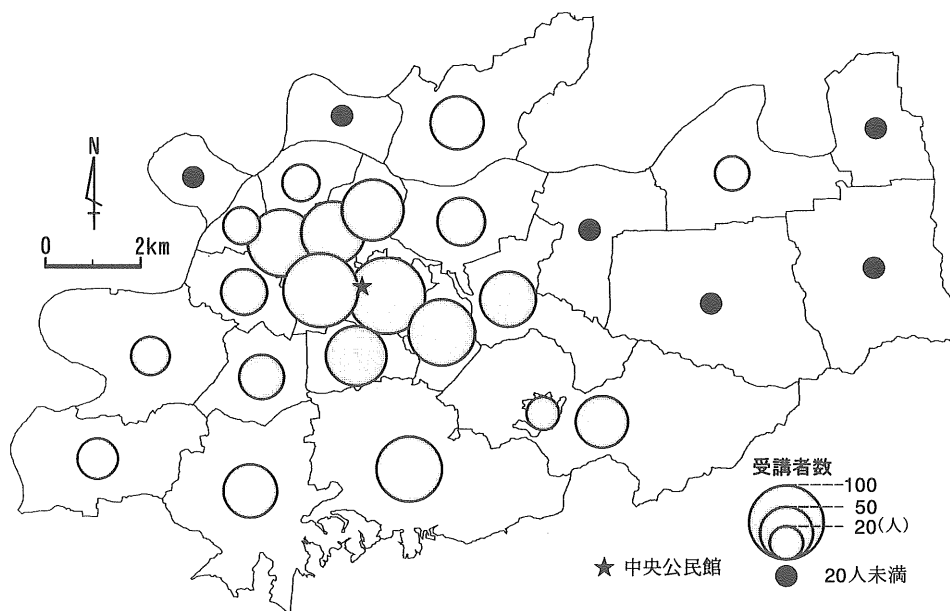
(資料：校区別年齢別人口統計表)

老人会活動の地域的差異のもう1つの要因として、老人会以外に高齢者の余暇活動の場が存在することが指摘できる。つまり、高齢者の趣味や興味に応じた活動を行う場所が、老人会以外に存在している。その1例として、久留米市の中央公民館で実施されている老人大学を示す<sup>12)</sup>。第8図は1980年から1995年までの老人大学受講者数の分布を校區別に示したものである。中央公民館の位置する西国分校区を中心とした市の北西部に受講者の大部分が居住している。聞き取りによると、受講者の中には地域の老人会に加入していない者も多いという。老人会に加入しない高齢者の活動の場として老人大学が機能していると考えられる<sup>13)</sup>。中央公民館では、老人大学の他にも社交ダンス、書道などの様々なクラブ活動が行われており、多くの高齢者が参加している。しかし、このような活動に参加する高齢者のうち、地域の老人会活動に参加している人の数はそれほど多くないという。

1995年度の老人大学受講者72名を対象としたアンケートによると、64名(89%)の通学時間が30

分未満であった。このことから、中央公民館に近接した地域からの受講が卓越していることが明らかである。また、同調査によると、受講者72名のうち53名(74%)が60歳から69歳であった。このことから、老人大学受講者の大部分は市の北西部に居住する比較的若い高齢者であると考えられる。久留米市の中心部である市の北西部では、老人会に加入しなくても中央公民館やその他の施設で行われるクラブ活動に参加することによって、自分の趣味を満たす活動が可能となる。

このことは、北西部における老人会加入率の低さと密接に関連していると考えられる。比較的若い高齢者が老人会活動に参加せず、他の活動に参加することによって、老人会のメンバーは以前から加入している後期高齢者が中心となり、社会参加活動を中心とした活動になっていると考えられる。一方、市の南西部は老人会への加入率は低いが、後期高齢人口比率がそれほど高くないため、体力的な衰えによる活動内容の制限はあまりないと思われる。市の北西部に比べると中央公民館まで遠いため、老人会が趣味や娯楽の活動の場とし



第8図 久留米市における校區別の老人大学受講者数(1980~1995年)

注) 受講者数は1980~1995年の総数である。

(資料: 久留米市中央公民館資料)



て機能し、社会参加活動のみでなく、様々な活動がバランス良く行われているのではないだろうか。

#### IV おわりに

本報告は、高齢者が取り結ぶ組織の中で最も代表的な組織である老人会を取り上げ、その活動に見られる地域的な差異およびその要因の考察を行った。分析の結果、得られた知見を要約すると以下の通りである。

1) 久留米市の老人会活動は市の北西部、南西部、東部で活動に差異が存在することが明らかとなった。北西部は加入率が低く、活動内容も社会参加活動が中心で、あまり活発ではない。南西部は、加入率は低いものの社会参加活動のみでなく、様々な活動がバランス良く行われている。東部は加入率が高いことに特徴がある。このことは、老人会活動の地域的差異が都市の構造と密接に関わっていることを示唆していると考えられる。しかし、本報告では久留米市の都市構造と老人会活

動との関連を考察することはできなかった。この点については今後の課題としたい。

2) 老人会活動の地域的差異の要因として、後期高齢人口の存在および老人会以外の活動の場の存在、が示唆された。高齢者が老人会以外の場で活動することは決して悪いことではない。しかし、在宅介護や地域での介護が注目されている現在、高齢者の活動の場が増えることによって、高齢者による地域的なつながりとしての老人会活動が衰退することは注意を要すると思われる。この点については、老人会に非加入の高齢者に対する調査も行い、老人会以外の活動について検討する必要がある。

今後、人口高齢化がさらに進展すると、高齢者の地域的なまとまりとしての老人会の果たす役割はさらに重要なものとなると考えられる。本報告では久留米市の老人会活動の実態を記述し考察することに終始したが、上記の課題を含め、今後さらに研究を進めることが必要である。

現地調査の際には、久留米市福祉部高齢化対策室 西野雅広氏、久留米市老人クラブ連合会 彌永政男氏、久留米市中央公民館 河村孝子氏、各老人クラブ会長をはじめとする多くの方のご協力をいただきました。本報告の作成は、筑波大学地球科学系の齋藤 功先生、手塚 章先生、久留米大学経済学部の浅見良露先生にご指導いただきました。末筆ながら、記して感謝申し上げます。

なお、本報告の内容は地域地理学会第8回大会（1998年7月）において発表した。

#### [注および参考文献]

- 1) 嵯峨座晴夫（1997）：人口構造・人口高齢化研究の展開。人口学研究，20，73-81.
- 2) 直井道子（1994）：余暇行動と幸福感。森岡清志・中林一樹編『変容する高齢者像—大都市高齢者のライフスタイル』，日本評論社，141-157.
- 3) たとえば、仙田裕子（1993）：高齢者の生活空間—社会関係からの視点—。地理学評論，66A，383-400。  
田原裕子・荒井良雄・川口太郎（1996）：大都市圏郊外地域に居住する高齢者の生活空間と定住意志—埼玉県越谷市の事例—。人文地理，48，301-316。  
中鉢奈津子（1998）：京都市における高齢者の外出行動。人文地理，50，172-187.
- 4) この調査は、全国の60歳以上高齢者から無作為抽出された3000人の高齢者に対する面接調査によって行われた。  
総務庁長官官房老人対策室（1988）：『高齢者の地域社会への参加に関する調査結果の概要』81p.
- 5) 久留米市老人クラブ連合会彌永氏のご教示による。
- 6) 前掲4).
- 7) [加入率]=[老人会加入者数]÷[60歳以上人口]×100。老人会は、60歳以上の高齢者が参加可能であるため、60歳以上人口を母集団とした。

- 8) 浅見良露 (1997) : 城下町から筑紫平野の中心都市に 久留米市. 平岡昭利編『九州 地図で読む百年』, 古今書院, 17-24.
- 9) 佐藤 (1992) は, 秋田県を例として, 農山村地域では老人会加入率が高く, 都市地域では加入率が低いことを指摘している. 佐藤はその要因として, 都市地域では伝統的な地域社会が崩壊していることを挙げている.  
佐藤 守 (1992) : 秋田県における高齢者の活動状況. 佐藤 守・佐藤 怜・澤井セイ子・松岡昌則 : 『長寿社会—高齢者と地域社会—』, 多賀出版株式会社, 95-130.
- 10) 市の中心部に位置するある校区では, 一声運動によって9,000円の補助金を得た (平成9年度).
- 11) 老人会活動の4区分がすべて均等に行われた場合, 社会参加活動の割合は25%となる. このことから, 30%で社会参加活動卓越型と中間型を区分するのは適当であると思われる.
- 12) 老人大学は, 久留米市に居住する高齢者を対象として1973年より実施されている. 1996年度は, 教養コースと選択コース (書道, 園芸, 水墨画) が開設され, 85名が受講した.
- 13) 中央公民館での聞き取り調査によると, 老人大学受講者は講座修了後, それぞれの居住地に戻り地域での老人会活動のリーダーとして活動することが期待されている.